

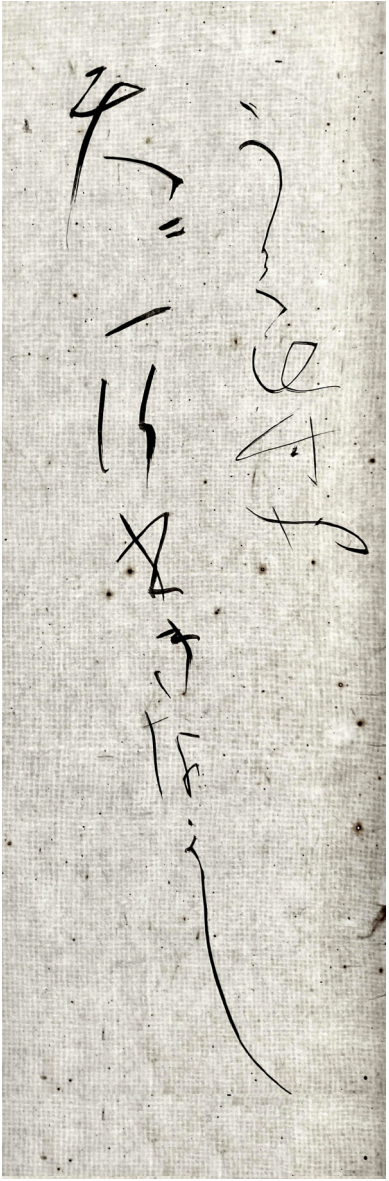
あそ

4

2026

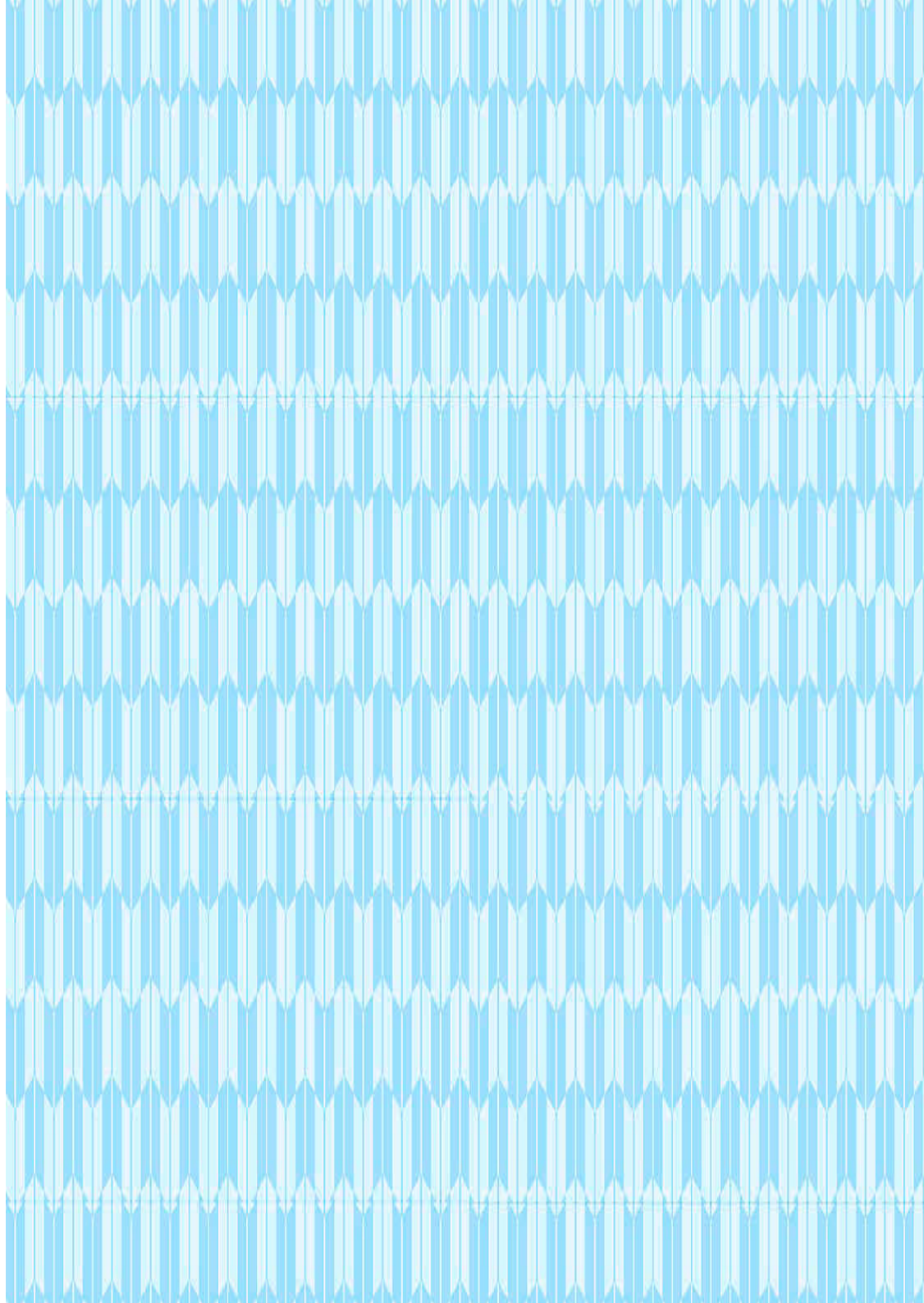


撮影・不寝



春
蚓
烁
蛇

うぐひすや天に一行書きながし



四月集

坐・誹

佐藤 竹僊

白梅ポピペ紅梅パプポ花盛り

ふわふわとふはふは競べどこも春

つんつんと草が突きでる春の雪

野良猫が目高の水を飲んでゐる

五位鷺が蓑毛ゆらしてかゆがれり

盾が矛矛が盾かも吹流し

朝顔の二度寝のうちひらきたる

親しきは露伴の紙魚と秋の雨

人生が有つた不思議にふぐの鰭

葉もれ日の一点もなし寒の幹

けふ空を見たであらうか冬燈

ポストもうお地藏さんに雪の村

北風よたまになよなよ吹いてみて

酒蔵

篠田純子

元禄の酒蔵の梁春寒し

横井戸の酒水旨し木芽風

対岸にうぐひす初音しかと聞く

春一番鳥居の台座梅花形なり

春一番わたり廊下の巫女の裾

ミサイルを避け孫帰る余寒かな

氷点

篠田大佳

春立つやこゑあるこゑのありがたし

雪催嘘にゆかしといふまこと

投票済証握る手中へ春の雪

氷点の日陰につらら伸びにけり

残雪や焦るふりするコメディアン

高架下雪解ににじむ塗絵かな

すみつこの受験子梅よりソースの香

天神の梅見名残のつる瀬かな

春めくや傷に完治の先がある

晴の日

須賀敏子

ミモザ咲く公園迄の農の庭
ミモザ咲く女三代続きけり
晴の日や乙女椿の淡き色
クロワツサン今日は観梅バスの旅
白色の桜その後サクランボ
アスパラの細き一本鉢育ち
春なのに腰痛の日々続きけり

雑詠

長崎桂子

今宵ぐんぐんのぼるうるはしき満月
満月や帰路いそぐ人背をまるめ
十薬も芽吹き早きにおどろきて
選挙をへ積雪五センチ日はのぼる
ぬるま湯を朝よりつかふ積雪に
梅の香に友と道連れ話に夢中
紅梅や笑みをたたへておほらかに
おくゆかし白梅ひかへめ三分咲き
ぬくい日つづくや寒あやめ紫こき
花粉とぶニュースこころして用意する

春寒

冬ざるる園の一隅棕栲青く
廃園の幹地に伏して梅咲きぬ
梅園の果てや老木倒れ咲く
裸木となりて空透く大櫟
裸木の全ての枝に日当たりぬ
若草に足裏忙しく短足犬
草萌えに犬の歩軽し癒えたれば
初雪の積もりて知らぬ町になる
四世紀の剣の話二月尽

森なほ子

雑詠

赤座典子

投票所若者多し春夕焼
寒明けや幼は歩みせかさされず
てのひらの二日続きの暖かさ
戦争と選挙と五輪春吹雪
春雪やきらきらネームの舞高し
白銀の五輪の余韻二月尽く

春の雪

秋川泉

降り止まぬ白き闇雪道のスタック

雲揺らぐ命あふるる冬水田んぼ

病窓の止む気配なき春の雪

どら焼をひとつ分ちてバレンティン

朝まだき琴弾鳥に起こされて

飛んで跳ね

七郎衛門吉保

冬の土吸ひ取り紙に水を蒔き

列島や雪と乾きの輪唱に

豆撒けど米露の鬼の逃げもせず

寒紅梅女総理と競ひけり

帰国便のパンダに手振り冬夕焼

飛び跳ねて山を笑はすミラノかな

冬五輪ドローン画像の三次元

麗けしミラノコレティナ璃来と龍

44濃き牛乳や蝶の翅

変はりたる俳句選者の初音かな

秋収集

ねこじやしらし雨に揺られ枯れてゐる

佐藤 竹僊

大寒や加温と加湿目一杯

七郎衛門吉保

大雪や長靴買へぬ下駄の朝

踊子のシームまつすぐ淑気なる

篠田純子

五角ごうかくの箸よく売れて梅まつり

初仕事今日は真面目な営業部

篠田大佳

寒風を吸ひ肺臓を泳ぐうを

寒の朝古き竹刀の絞り癖

ポールペン三本並ぶ朧月

須賀敏子

麗らかや背筋伸ばしてさあ一步

年新た今朝かぜぬくしほほゑまし
年新たお箸いただくありがたき
夜よりも日暮れ寂しきお元日
初詣噛めばくつつく大師飴
初芝居声張り上げて子役かな
「あたわり」と生きる人々去年今年
寒紅梅抓めば蕾柔かし
初春や鐘つき堂に光射す
元旦の命ことほぎ足洗ふ
ことほぎて正月膳の和洋中

長崎桂子

森なほ子

赤座典子

秋川 泉

喜孝抄



境内に電話ボックス 冬燈

佐藤竹僊

この句に詠まれている場所は長らく『あを』の同人でいらした田中藤穂さんの菩提寺と伺っています。藤穂さんのご葬儀の折、広い境内に電話ボックスが辺りを照らしているのに気が付かれました。いつも豊富な話題で句会を楽しませて下さった藤穂さんに重ねて、この句を作られたのではと思いました。句会では本当に沢山のことを教えていただきました。藤穂さんの作られる句も大好きでした。(典子)

階上の人の音するけさの冬

佐藤竹僊

この作品を拝読してすぐ、芭蕉の『秋深き隣は何をする人ぞ』を思いました。作者は、階上の人と常は交流があるのかそれとも、朝夕の挨拶くらいなのかそれとも、全く他人同士であり顔を合わせることもないのか等々思いをめぐらし、私は私の物語を考えました。

階上には、ちょっと気になる年の頃は、四十歳くらいの女性が住んでいる。作者は、その人と素っ気なくもないがそう親しく言葉を交わすほどでもない。その女性が起き出した様子だ。立冬の頃と云っても、この節は全く冬めいてはいない。むしろ何をするのも快適だ。さーそれなら私も、美味しい朝食の後、散歩に出てみようそれにしても階上の人、今朝は妙にばたばたしている。何な

の दौरान (泉)

小春日のひとりのけんぱけんぱ

秋川 泉

作者は気持ちのいい小春日に、地面に大きな丸や三角が書かれたままになっているのを見つけました。つい懐かしくて、けんけんぱと、輪をたどりました。童心に返って、身も心も温かくなられたことでしょう。泉さんが楽しげに声をあげながら、飛んでいる様子を想像して、ほっこりといたしました。(典子)

§

「ひとりあそび」といへば、憂愁をすこしおぼえる。が作者の泉さんはそのやうな心もちとはちがふやうだ。路地の一隅、小春日のなかで黙々と子供がひとり遊んでゐる。泉さんはしばらく立ち止まり目の前の光景とダブるやうに小さい頃に戻った泉さんも遊ばれたやうだ。(喜孝)

柚子の風呂手術の痕を撫でにけり

七郎衛門吉保

冬至の柚子風呂に入られた作者。良い香のする温かな中の幸福感。大変な手術をされての年の暮。その手術の痕をしみじみ撫でていらっしやる。痕そのものが戦友のように愛おしい。本当に良かった。よく頑張った。身体のみずみずみまで大切な戦友のよう。本当にありがとう。感謝しているよと疵痕に語りかけての感慨深い作品と鑑賞致しました。(泉)

凜として人寄せ付けぬ 枯野原

七郎衛門吉保

枯野原の本質を捉えて詠まれた作品。これ以上の言葉はいらぬが、吉保さんの遇はれた時刻を想像して読むのも一興。しかしこの句の枯野原は昼夜を問はず凜としてゐることだらう。(喜孝)

初御籤 良縁有り と今さらに

篠田純子

「良縁有り」を縁談だけでなく、もつと広くとらえますと、初御籤は、今年全体の運気の流れの良さを示しているように思われます。さまざまな場面での良い出会いと御縁は、今年をさらに良い事への羅針盤と捉えました。良い一年でありますように(泉)

夢はじめ 心配かほの母出でぬ

篠田純子

「初夢」を夢祝、夢流し、初枕、寝枕ともいふ。掲句の「夢はじめ」はこれらに比してやはらかにやさしい。母の出でくる初夢にふさはしい。わたしもときたま母や妻の夢を見るのだが、何の言葉も聞いた覚えがない。まして掲句のやうに「顔」も出さない。夢の状況から母だと感じるくらい。思ひが浅いのだらう。泉さんの宝船のおかげであらうか。心配顔でも母にあふことができ温かい目ざめであつたことだらう。(喜孝)

幾度も君間違へよ冬の風

篠田大桂

「間違いを恐れる勿れ」と誰かに言えるようになったのは、何歳頃のことだったでしょう。作者の年令よりもずっと後のことだったような気がします。厳しい状況の中でも、しっかりと御自分の意見を述べている。頼もしいお兄さんです。(典子)

臆病な君と同じ雪を見たい

篠田大佳

その方ともう一緒に雪を見ましたか。臆病な方は、作者がさり気なく誘ってくださるのを待っているのではないのでしょうか。何でも思っているだけでなく一步を踏み出してみることです。願っているように、物事は運ばないかもしれません。それでも歩み出す勇氣は、じっと動かないで止まっていたままの時を刻むよりも、後から考えたと良かっただと思えるものです。(泉)

友は冬水平線の中にゐる

篠田大佳

ここでの「冬」は四季の「冬」の則を越えてゐる。友の今の状況を「冬」と捉へてゐる。作者は海を見てゐる。遙かな空と接する水平線。そこに友はゐると詠む。大胆で斬新な表現だ。透き通る悲しみを覚えた。(喜孝)

スマホ注文操作まだまだ外は雪

須賀敏子

新しいスマホになさるのですね。操作は、獲得して慣れるまで 本当に苦労しますね。しんしんと降る雪の日に、ドキドキワクワクしながら、懸命に努めている作者がありありと目に浮かびます。(泉)

降る雪やお風呂の後はアイスでしょ

須賀敏子

銭湯では浴後腰に手を当ててコーヒー牛乳を飲むといふのがおきまり。敏子さんはお風呂の後のアイスが至福のひとつであるといふ。なかなかこれも良ささうだ。この句の「降る雪や」がなんともよい。草田男の名句がほんのり透かし見えつつも、の上五である。「でしょ」のフレーズ若々しく気に入つてゐる。(喜孝)

藤原 岳 端 然 と 見 ゆ 北 勢 線

長崎桂子

藤原岳は、「花の百名山」でも知られる石灰岩の山。山頂からの伊勢湾、琵琶湖の大パノラマも素晴らしいことでしょう。そこを、三岐鉄道の北勢線が走っている。壮大なスケールの作品。私もぜひ、この素晴らしい風景を見たいなあーと しみじみ思いました。(泉)

調査員 厨きれいと言ふ暮に

長崎桂子

調査員は高齢者への市から来た人であらうか。その人が厨を「きれい」と言つたといふ。桂子さんの手が浮かんだ。確りとした働き者の手であつた。あの手なら厨といはずあらゆる所が見事に整理整頓されてゐるはずだ。「暮に」と一寸非難めいたささやかな反抗がをかしい。わたしも三月に一度トイレまで見て回られる。ウザイことだ。野原のやうに楽しく作つた狭庭は見やうともしない。老人は一人ではなにもできない。先日もWIFIの器具を交換した時も子供の承認を必要とした。高齢者ゆえの避けられぬ屈辱。(喜孝)

一人なら蹴散らして行く銀杏黄葉

森なほ子

銀杏黄葉の敷きつめられた道は、絢爛で本当に見事です。蹴散らしながら自分の道を作つて行く、気持ちスカッとする句です。一人ならというのも、とてもよく分かります。以前には、私も小さな石を蹴りながら家に帰ったりしていました。なほ子さんの句のように、綺麗な場面ではありません。(典子)

§

一面の散り敷かれた銀杏黄葉。作者は、どなたかのご一緒なのですね。輝く黄色の絨毯を踏みしめて、心の中では、これを思い切り蹴散らしてみたい!!と…。出来なかつたのですね。今度は、必ずおひとり、思い切り子供のようになさいませぬ。残念なお気持ち、とても分かります。(泉)

短日や西の山の端燠赤く

森なほ子

なほ子さんの風景句は珍しいのではないかといふ印象。あくまで印象である。

夕立の雲路はるかになるままに入日色こきにしの山のは 小宰相

草も木もまた白露の入日影秋に色つく西の山のは 正徹

「入日色こき」または「秋に色つく」と山の端にかかる落日を和歌で詠まれてゐる。なほ子さんの句は燠のやうだと映像として印象深く詠まれた。実際そのやうに山の端が赤く溶けて見えるから不思議。俳句らしい言い留め方と感心した。他家は知らず我家の子たちに「燠」は分かるか不安だ。(喜孝)

大皿を九枚洗ふクリスマス

赤座典子

クリスマスの幸せなパーティー。九種類の美味しい料理。そのとりどりの大皿。楽しかった集いの後、大皿九枚を洗う作者の幸福感が伝わって来ます。今年も、こんな素晴らしいクリスマスが迎えられた事が、いっそう思い出深いものになりましたね。(泉)

問診のストレスに○開戦日

赤座典子

わたしは十二月八日開戦日の前に生まれ。戦前派である。それは兎も角この句の「開戦日」は常の句の敗戦日とは趣を異にしてゐる。新しい医院や歯科にかかると門親書が渡される。細々と

訊かれる。このこと自体ストレスが溜まる。ストレスありますか？と直には訊かれたのだからうか。確りと○をつけた。そのことと開戦日とは繋がつてゐるはずはない。ないのだがなんだかをかしい。説明せよと云はれると典子さんも困られかもしれない。このやうに開戦日が詠まれる。開戦日も遠くなつたものだ。(喜孝)



片仮名・カタカナ

近頃、ニュースでも俳句でもわからないカタカナ語が目につく。「わからない」のは私の不勉強ゆゑだが。今までにない事象を伝えるのに原語をカタカナに変へるのは日本語の利便性でもある。雑誌を読んでゐたら「障子張る若い夫婦のデイワイアイ 古谷廣行」といふ句にであつた。調べた。意味を知つたら口をあんどり。きつと社会常識の範疇に入る言葉なのだらう。わたしのアンテナが錆付いてゐる証左。新しい言葉を使ふだけでは斬新な俳句には……。文明開化の時代、沢山の新語が生まれた。原語をカタカナにした言葉もあつたが漢語にと先人は苦勞された。『中華人民共和国』といふ国名に和製漢語が使はれてゐると聞いたことがある。(喜孝記)

桜餅見え透く嘘を笑ひけり

田中藤穂

「あを」二〇一〇年四月号掲載。卓に置かれた桜餅がある。見え透いた嘘を聞いて、笑ってしまった。桜餅の中身が見透かされていると思うくらいの鋭い洞察も感じつつ、桜餅も嘘を笑っているように見えるくらいの、朗らかな気持ちも込められているように思います。嘘の理由、内容、構造、嘘が明るみになった時の想定される対応、これらの全てを見透かされていて、この嘘はいつ壊されてもおかしくないけれども、作者は、まるで余裕を持って笑っています。嘘に対しては、特に、現代は嘘が蔓延しすぎていて、嘘を検証することも盛んに行われていますが、そんな検証行為も幼いと思わせてしまうような余裕ぶりに驚くとともに、ふと懐かしさを感じてしまいました。

篠田大佳

季語あれこれ

今月はゆく春を堪能しやう。「蛙の目借時」は難しい季語。『俳諧歳時記菜草』に「年浪草、俳諧歳時記などに、只めかり時とのみ出せるはことたらず、必蛙のめかり時と云べし。」の一節がある。



蛙の目借時

メール打つ指おぼつかな目借時
 句作りも倦むしほし頬杖目借時
 ふたりして蛙の目借りどき首肯
 二の腕の力衰ふ目借時

芝 尚子
 鈴木多枝子
 佐藤 竹僊
 大日向幸江

杉の子の目覚めの辺り目借時
 目借時カタコトカタとファックス機
 缶ビールほぐし蛙の目借り時
 助手席でぬひぐるみ抱き目借時
 返信がのびのびになる目借時
 文机のオバマの著作目借時

春深し

春深し舞ふからくりの三番叟
 宇治川を小舟に揺られ春ふかし
 見詰めあふ吾と弟よ春深き
 当選後すぐ急死とや春深き
 ゆつくりと降りる終点春ふかし
 昭和の家に古地図のありて春ふかし
 背やはき月光菩薩春ふかし
 春深し困った顔のフラメンコ
 春深し金鵝勲章残し逝く
 春深し池に居着きし渡来亀
 春深し若者らしき人体図

森山のりこ
 田中 藤穂
 堀内 一郎
 堀内 一郎
 竹内 弘子
 赤座 典子
 田中 藤穂
 篠田 純子
 芝宮須磨子
 竹内 弘子
 大日向幸江

春深更試し切りするテレビジョン
 春深み間違ひ電話長引かす
 春深し奇数日ごとの内用菓
 突然にブルーインパルス春深む
 又増へし診察券や春深む
 春深し先代の名のクローン犬

春闌

器よりはみ出した人春闌くる
 脳すべてこはれてしまひ春闌ける
 珊瑚礁隆起せし島春闌ける
 棹さしの胸板厚し春闌ける
 戸の口を花園にして春闌ける
 門入れば春たけなはや能の庭
 土器を石に打ちつけ春闌る
 古ビルの中にガス燈春闌ける
 古時計気儘に鳴りて春闌ける
 甞声は大使館前春闌る
 尾ひれたれ春たけなはの金魚玉

佐藤 竹僊
 佐藤 竹僊
 赤座 典子
 須賀 敏子
 須賀 敏子
 篠田 純子

金色に輝く巻毛春闌くる
 積みて崩す十七文字春闌
 春闌くる紅に重ねるちがふ紅
 春闌くるパフェは玻璃の皿の上
 春闌けるベツツ大谷フリーマン
 おとなりの星もパチパチ春更けし

晩春

飛驒晩春奥行き深き民芸店
 晩春や乾び藻を焼く男あり
 晩春や明王火炎蒼なせり
 晩春のままごと遊びひとりきり

赤座 典子
 佐藤 竹僊
 佐藤 竹僊
 赤座 典子
 篠田 純子
 佐藤 竹僊

暮春

暮の春墓域を抜ける散歩道
 葉ぼたんの花となりけり暮の春
 飛ぶときは手をひろげます暮の春
 夭折には手遅れなりし暮の春
 千代紙を折る夢は何暮の春
 捨つるべきものを束ねる暮の春

鎌倉喜久恵
 芝 尚子
 佐藤 竹僊
 佐藤 竹僊
 芝 尚子
 田中 藤穂

勲章の胸に在る日や暮の春
 祝ひ日に骨折をせり暮の春
 読みきれずポストへ返す暮の春
 変り目に天気痛なり暮の春
 月明り回り道して暮春かな
 暮春かなとほまはりして月の道
 痛み止め魂抜けてゆく暮春
 大木を回りにて元へ暮春かな
 太平洋東シナ海暮春かな
 來世も前世も暮春われはみず

ゆく春

行く春や煙出るほどパン焼いて
 行く春や御身あはせて道祖神
 逝く春や胸にのこれる轍跡
 雨の日に喜劇見に行く春隣
 行く春や家猫となりジャズを聴く
 行く春や銃は残酷夢であれ
 ゆく春も綱のうへなり傘をさし

篠田 純子
 赤座 典子
 赤座 典子
 七郎衛門吉保
 河合 笑子
 河合 笑子
 後藤 志づ
 後藤 志づ
 佐藤 竹僊
 赤座 典子
 佐藤 竹僊

行く春や虚子展終の日となりぬ
 行く春や五十七の訃突然に
 逝く春をけちらす舟のエンジン音
 ゆく春の両手ひろげて寄する波
 行く春を嵐電駆って惜しみけり
 行く春の鷗の翼しなやかに
 きりぎしに触れほろほろと春の果
 逝く人と醫師とゑみあふ春の果
 花魁の模型窓向く春の果

木村茂登子
 須賀 敏子
 山莊 慶子
 佐藤 竹僊
 井上 石動
 森 なほ子
 佐藤 竹僊
 佐藤 竹僊
 佐藤 竹僊
 篠田 大佳



春惜む

三味線の古き合の手春惜しむ
寝ねざまの一語消えつつ春惜しむ
黒猫に惜春我も歩を返す
埋立に貝の死を嗅ぎ春惜む
今と云ふ時に身をおき春惜しむ
抽斗になれば棚に春惜む
高嶺より三筋雲わき春惜む

河合 笑子
渡辺 友七
後藤 志づ
渡邊 友七
芝宮須磨子
堀内 一郎
芝宮須磨子



春惜む三人句碑の前うしろ
車椅子握る手に汗春惜しむ
春惜しむ古き種痘のあと撫でて
焼けのこる旋盤に春惜しみけり
高齢後期象の花子の春惜む
何となく落ち着かぬ日々春惜しむ

堀内 一郎
佐藤 恭子
芝 尚子
堀内 一郎
堀内 一郎
早崎 泰江

花筏

「ハナイカダ」はミズキ科の落葉低木しか頭に無いときこの季語に出会ひとまどつた記憶がある。

花筏古墳山より流れ出づ
花筏漂ふままの池狭し
夕食はカレーで決りね花筏
命には加へ算なし花筏
水門の暗き彼方へ花筏
白鷺を残して流る花筏
花筏昔男の色模様

田中 藤穂
芝宮須磨子
森 理和
森 理和
木村茂登子
斉藤 裕子
芝 尚子

花筏組みて崩るる水明り
神田川淀みに逆る花筏
とどまるとおもひしものを花筏
川の面を埋めつくせる花筏
オフエリヤ尼にはならず花筏
散り頻り水面をはしる花筏
花筏一直線に鳥よぎる
井の頭たふたふたふと花筏
白鷺の降り立つ川辺花筏
そそそと空を滑りて花筏
致死量の月日重ねて花筏
またひとり去りにし友よ花筏
花筏の下をゆつたり鷗水輪
地獄いや天國も嫌花いかだ
水鳥の遊びしところ花いかだ

芝 尚子
芝宮須磨子
佐藤 竹僊
鎌倉喜久恵
木村茂登子
長崎 桂子
篠田 純子
篠田 純子
須賀 敏子
佐藤 竹僊
佐藤 竹僊
渡邊 京子
佐藤 竹僊
佐藤 竹僊
秋川 泉

花びら

花びらとコップ酒干す美男かな
深みどり鯉に花びら吸ひこまる

篠田 純子
松村美智子

花びらのちりゆくさを杉木立
花びらのこぼれて湯舟弥生かな
側溝に花びら寄せて疾風過ぐ
花びらと径わたりゆく御苑かな
花びらのびつしりとありあぎとへる
花びらを肩に飛石伝ひ行く
花びらを水面に浮べ水草生ふ
何処からか花びら四五枚池動く
母命日さくら花びら散るさくら
濃きうすき花片つまむ八重櫻
花びらを追つてまぶしき宙見上ぐ
花びらを踏みて銀座へ有楽町
霧雨と花びら触るる両の頬
花びらの虚空に蝶の動きせり
我に触るる花びら一期一会かな

森 理和
鎌倉喜久恵
吉成美代子
斉藤 裕子
佐藤 竹僊
佐藤 竹僊
森山のりこ
長崎 桂子
森 理和
佐藤 恭子
佐藤 恭子
佐藤 恭子
佐藤 恭子
佐藤 恭子
佐藤 恭子
森 なほ子

とどきける落花を縫ひし鐘の音
落花積む岳温泉の桜坂

佐藤 竹僊
赤座 典子

落花みな飛花となりゆく今朝の風

森 なほ子

御衣黄の静かな雨に落花かな

須賀 敏子

いぶかしとあたりみまはす落花かな

佐藤 竹僊

ハーレーをはらと落花の二三片

森 なほ子

落花するレジーナの浮遊月へ

秋川 泉

落花ひらひらこれで終はりと云ふやうに

森 なほ子

また落花やぐらのそばで父を待つ

佐藤 竹僊

ペランダではためく「シヤツ」飛花落花

須賀 敏子

残る花

残る花路地に野良猫伏して死す

松村美智子

おもかげや葉かげに青む夜の残花

渡邊 友七

児童公園残花の下の滑り台

田中 藤穂

ぬる湯あつ湯ケロリンの桶残る花

赤座 典子

花の雲

花の雲バスを待たずに歩きだす

東 亜未



花の雲三角形に揺揺る

赤座 典子

花の雲民家の屋根を覆ひたり

長崎 桂子

熱爛の魔法瓶もて花の雲

東 亜未

立てて運ぶ假設のトイレ花の雲

佐藤 竹僊

破顔のみそその他抹消花の雲

佐藤 竹僊

花の雲波郷の清瀬川流る

田中 藤穂

花の雲富士の霊峰野の果に

秋川 泉

極楽橋を一方通行花の雲

赤座 典子

花の雲ハンピロカウにはすぐに飽き

佐藤 竹僊

花の雨

花の雨熱きコーヒー紙コップ

鈴木多枝子

廃業と貼紙二軒花の雨

赤座 典子

花の雨増えし病名囁みしめる

関口 ゆき

書きよどむ悔みの手紙花の雨

田中 藤穂

悲しみを煮つめて寡婦の花の雨

関口 ゆき

ことのほか疎水のきほふ花の雨

佐藤 竹僊

花の雨昼ひとり臥し咳地獄

渡邊 友七

花の雨上がる蚯蚓のいくところ

佐藤 恭子

大僧正翳す大傘花の雨

森山のりこ

花の雨安らぐ時を得て独り

木村茂登子

花の雨眠くなるまで本読みて

芝 尚子

花の雨どんでんかへしと言ふ仕掛

長崎 桂子

花の雨蛙のやうに整

森 理和

花の雨前歯小股に神楽坂

森 理和

花の雨若可菜さんちの石瓦

佐藤 恭子

花の雨音のみびく堂の内

木村茂登子

花の雨笹のもれ出づ竹の堀

佐藤 恭子

丸窓は竹のうしろに花の雨

佐藤 恭子

付下げの裾に触れたる花の雨

佐藤 恭子

阿吽の虎丈余のしっぽ花の雨

佐藤 恭子

花の雨油塗れの油差

佐藤 竹僊

昭和の歌百曲花の雨一と日

田中 藤穂

紫陽花の雨呼ぶ顔を持ってをり

大日向幸江

花の雨供養の膳に猫がのり

秋川 泉

北枕西面に寝て花の雨

田中 藤穂

抜くと決め歯医者へ向かふ花の雨

須賀 敏子

花の雨気ままに部屋の様様変へ

大日向幸江

締め括る一文字探す花の雨

大日向幸江

花の雨傘寿のもとに集ふ「あを」

篠田 純子

再開の動物園に花の雨

大日向幸江

花の雨小走りに行くヨガレッスン

秋川 泉

花の雨童の影の笑ひけり

篠田 大佳

花の雨市民マラソンの支援者

長崎 桂子

蔦重のこと読みをれば花の雨

森 なほ子

花の雨佃小橋の整

篠田 純子

トンネルをぬけて一面花の雨

秋川 泉

花の雨客なき発車サイン音

篠田 大佳

余花の雨八十年咲き妹の逝く

七郎衛門吉保
(佐藤喜孝)

あとがき

今月の表紙

「花梨」と木札が下がっていました。秋には榎檀の実がなります。今年あたり年なのでしょう。花が沢山咲きそうです。よく見ると下の方の葉っぱに蠅が止まっています。「春の蠅受粉担当待機中」

撮影場所・浜離宮恩賜庭園（撮影・不寝）



「季語あれこれ」

このページを作つてみてつくづく思ふことがある。ひとつは「あを」作品群の変化にとんだ面白さである。顔を持つた一句一句を懐かしく読みつつ作業をする。はつとすると佳句に初めてやうに出会ひ己の不明を恥じつつ喜ぶ。又、意味不明な自作に汗顔することたびたびである。昔日、田中藤穂さんがあの句私の句かしら、とクリーム(?)を

つけられたことも懐かしい。勿論さうですよといきつた。藤穂さんもわたしとおなじやうに自句かと疑はれてゐること、すこし意を強くしたことだ。

『北斗の拳』

日本へ来るきっかけが日本のアニメ文化だと聞く。そして私の知らないアニメの名が次々とインタビュアーに答へてゐる。これではまずいといささか不安になりよく耳にする『北斗の拳』の文庫本を大人買いした。「199X年世界は核の炎に包まれ、文明は消え去り、世界は暴力が支配する時代になっていた。」といふ設定。今の世の中に通じるテーマである。遅々として読み進まない。(喜孝)

二〇二六年四月号

発行日 四月二十三日

発行所

〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話

090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット/ティリ エイマ

会費 一五〇〇円(送料共) / 一年

ゆつちよ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)